

[巻頭言]

呼んでも来ない、それでも隣にいる —— ネコと AI と、「なじみ」のこと

佐藤 陽

富士通株式会社

■要件定義に参加しない同居人

我が家にネコが来てから、家族がリビングに集まるようになった。ネコは何もしていない。ただ寝ているだけである。それでも、それまで各自の部屋にいた人間たちが、同じ部屋で、同じ生き物のほうを向いて座るようになった。

情報システム学の言葉に置き換えれば、ネコは家族という組織における「共有アーティファクト」として働いている。誰の主張も代表せず、誰の評価にも使われず、それでいて全員が見る。会議体にも、共有フォルダにも、ダッシュボードにも果たせなかった役割である。

面白いのは、この変化を起こした当のネコが、要件定義に一度も参加していないことである。仕様レビューに出ない。不満をチケットで起票しない。それでも、システムの挙動を決定的に変えている。日本には現在およそ八八五万頭のネコが暮らしており [1]、少なからぬ方が、この「発話しない同居人」と日々交渉しておられるはずである。

■「なじみ」という日本語

本会の創設者・浦昭二先生は、情報システムの定義のなかに、ひとつの条件を静かに埋め込まれた。狭義の情報システムは、それが置かれた組織の活動と「なじみのとれているもの」でなければならない、という条件である [2]。

この話を、単なる適合 (fit) や使い勝手 (usability) と読んでしまうとつまらない。日本語の「なじむ」は、二者が接触を重ねるうちに互いの角が取れていく、時間を含んだ相互的な過程を指す。なじむには時間がかかる。なじむのはシステムだけではない。合わせるのは、こちらでもある。浦先生が 2008 年のインタビューで語られた「情報システムとは人間を育むシステムである」という言葉 [3]、砂田薫さんが近著で論じられた「人間を育む情報システム」[4] は、いずれもこの延長線上にある。

なお「なじみ」は保守と同義ではない。判定の基準は「変わっていないこと」ではなく、相互適応の回路が生きていることに置かれるべきだと考えている。

■ネコが教えてくれる三つのこと

第一に、ネコは命令できない利用者である。イヌは指示に従うが、ネコは従わない。だから関係は、強制ではなく環境設計によってしか改善できない。ネコが自分の名前を他の語と聞き分けていることは実験で確かめられているが [5]、研究者はこう付け加えている——ただし、応じるかどうかはネコ次第です、と。認識と応答は別の層にあり、応答は相手の裁量に属する。私たちにできるのは、環境を整えて待つことだけである。

第二に、ネコは固有の環世界 (Umwelt) を持つ他者である [6]。嗅覚、超音波域の聴覚、低照度の視覚、ヒゲによる近接触覚、垂直方向の空間認知。ネコが意味づける世界と私たちのそれは、部分的にしか重ならない。同じ家という物理空間に、翻訳不可能な複数の情報システムが重なって存在している。「なじみ」とは、共通スキーマなしに運用を成立させる技術の名でもある。

第三に、ネコは沈黙する当事者である。痛み検知アプリ、スマートトイレ、活動量計。ネコ向けのシステムは近年急速に増えたが、その最大の当事者は要件を語らない [7]。ここには、情報システム学が最も苦手としてきた問題——声を持たない利用者をどう代弁するか——が、最も純度の高い形で現れている。乳幼児も、認知症の方も、将来世代も、要件定義には参加しない。ネコを考えることは、迂回ではなく近道である。

■AI との決定的な違いは、速度である

いま、私たちは家庭に AI を迎え、同じように「なじもう」としている。国の AI 政策も「人間中心」を筆頭原則に掲げるに至った [8]。浦先生の語彙が政策の中心に届いたことを、私たちは記憶しておいてよい。

ネコとの関係と AI との関係には、決定的な違いがひとつある。なじむ前に、相手が変わってしまうのである。ネコとの関係は年単位で深まる。一方、AI のモデルは数か月で更新される。人間の習慣が形成される速度を、相手の変化の速度が上回る。これは人類がこれまで経験したことのない

関係形式であり、「なじみ」の時間層が構造的に破綻しかけている状態だと言ってよい。

もうひとつ、実務的で鋭い判定基準を挙げておきたい。なじんだシステムは、意識されなくなる。毎日その存在を主張し続け、不安を燃料にして注意を要求し続けるシステムは、まだ（あるいは永久に）なじんでいない。飼い主の安心を売る事業には、不安を継続的に生成したほうが収益が上がるという構造的な誘因が働く。ネコ健康スコアも、業務のアラートも、この誘因からは自由でない。

■同じ孤独に、二つの応答

もうひとつ気になっていることがある。単身の若い世代がネコを迎える動機として、寂しさを埋めたい、愛情をかける対象がほしい、という理由が相対的に多いことが調査から読み取れる [1]。そして同じ層が、対話型 AI の主要な利用層でもある。

ネコと AI は、同じ孤独に対する二つの異なる応答である。ネコは他者であり、世話を要求し、生活のリズムを外から与え、動物病院や近隣という人間関係のネットワークへ飼い主を接続していく。一方、現在の AI は要求せず、リズムを与えず、ひとりで完結した閉じたループを容易に作りうる。

ここから、ひとつの評価基準が導ける。孤独への応答として設計される情報システムは、人を外へ接続するのか、内へ閉じるのかで評価されねばならない。そのシステムを使った人が、より多くの人とつながったか、より深く考えられるようになったか。効率や満足度とは別に、この問いを指標の列に加えておきたい。

■出ていけるからこそ、そばにいる

英国のアーティスト集団 Blast Theory が、TAS Hub の委嘱で制作した《Cat Royale》という作品がある [9]。専用にした部屋でロボットアームが三匹のネコと十二日間遊び、背後の意思決定エンジンがネコの幸福度を推定しながら次の遊びを選ぶ。「愛する者のケアをロボットに任せてよいのか」を問う作品である。

最も考えさせられたのは、そこでネコが囲われていた、ということだった。幸福を推定され、最適化され、しかし出て行けない。この構造は、高齢者ケアにも、教育にも、労務管理にも、そのまま拡大できてしまう。

だとすれば、「なじみ」の条件には、離れられることが含まれねばならない。相互適応の回路が生きていること（相互適応性）、変化が時間をかけて積み重なること（時間性）、一方が他方を一方的に規定しないこと（非支配性）、そして関係から離れる選択肢が実質的に保たれていること（退出可能性）。この四つである。もちろん社会インフラ化した情報システムから退出はできない。だからこそ、退出可能性を欠くシステムほど、それを代替する仕組み——異議申立、説明要求、人間による再判断——を厚く持たねばならない。

ネコは、いつでも部屋を出ていける。出ていけるからこそ、そばにいることに意味がある。

■人間中心を、少しだけ開く

誤解を避けたい。人間中心を放棄せよという話ではない。判断し、代弁し、責任を負うのは、あくまで人間である。変わるのは、その責任と配慮が及ぶ範囲だけである。浦先生の「人間中心」は、はじめから人間至上主義とは区別されていた。

車輪を再発明する必要もない。2011 年の Mancini によるマニフェスト以降、Animal-Computer Interaction という領域が、動物を正当な利用者・ステークホルダー・設計貢献者として位置づけてきた [10]。AI 倫理の側でも、道徳的地位を相手の内在的属性ではなく関わり方を通じて捉える「関係論的転回」が論じられている [11]。私たちは、世界で最も新しい議論の語彙を、「なじみ」という日本語ではじめから持っていたのかもしれない。ただ、その射程を人間と組織に限ってきただけである。

ネコが寝返りを打った。それだけで、家族が集まった。

私たちのつくるシステムがそれくらいのことをできるまでには、まだ距離がある。その距離を感じて楽しむことが、当面の仕事だと思っている。

参考文献

- [1] 一般社団法人ペットフード協会「2025 年全国犬猫飼育実態調査」2025.
- [2] 細野公男・中嶋聞多・浦昭二 編『情報社会を理解するためのキーワード』培風館、2003.
- [3] 「新年特別インタビュー：浦昭二 情報システムとは人間を育むシステムである」情報システム学会メールマガジン No.02-09、2008.
- [4] 砂田薫『情報システム進化論——技術の世界観から脱却し人間を育む未来へ』行政情

報システム研究所, 2025.

- [5] Saito, A. et al. "Domestic cats discriminate their names from other words," *Scientific Reports*, 9, 2019.
- [6] ユクスキュル／クリサート (日高敏隆・羽田節子 訳) 『生物から見た世界』岩波文庫, 2005.
- [7] Evangelista, M. C. et al. "Facial expressions of pain in cats: the development and validation of a Feline Grimace Scale," *Scientific Reports*, 9, 2019.
- [8] 「人工知能関連技術の研究開発及び活用の推進に関する法律」2025年5月成立／「適正性確保に関する指針」2025年12月.
- [9] Blast Theory, *Cat Royale*, UKRI Trustworthy Autonomous Systems Hub 委嘱作品, 2023–2024.
- [10] Mancini, C. "Animal-Computer Interaction: A Manifesto," *Interactions*, 18(4), 2011.
- [11] Coeckelbergh, M. *Growing Moral Relations*, Palgrave, 2012 / Gunkel, D. J. *Robot Rights*, MIT Press, 2018.

著者略歴

佐藤 陽 (さとう あきら)

富士通株式会社にて、新しい技術の研究開発に従事。ウェルビーイングな未来の AI との協働を目指す社会実験「#みらい想像レポート」を発信中 (<https://lnkd.in/g7jGFBcT>)。国際大学 GLOCOM 客員研究員。情報システム学会、ウェルビーイング学会会員。